

Title	大学における初年次教育に関する研究 : 自己発見の支援
Author(s)	香川, 順子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46605
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	香川 順子
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 19957 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	大学における初年次教育に関する研究－自己発見の支援
論文審査委員	(主査) 教授 菅井 勝雄 (副査) 教授 老松 克博 教授 前迫 孝憲

論文内容の要旨

背景

急激な社会変化により、大学生のアイデンティティ形成の特徴や生き方、考え方が変化してきており、自己について考える機会も少なくなっている。このような状況を考えると、大学において自己実現についての支援が必要である。具体的には、自己をありのままに認識するために自分に関して学習し、他者との交流を通して多様な考え方を受け入れながら、自己を確立する機会を与えることが必要である。特に社会へ旅立つ前の準備期間である大学においては、このような学習の支援がより一層重要となる。

ところで日本の大学生は 2004 年度の該当年齢人口の約 50% となり、「ユニバーサル・アクセス型」の大学の段階へ移行した。万人のための教育機会を提供する段階に突入り、多様な学生を迎え入れ、しかも質の良い教育をし、先端技術を用いた教育を提供するなど、多様な改革を必要とする時期に来ている。その中でも特に大学での学習を行うための準備にあたる教育として、近年初年次教育が注目されている。

日本において初年次教育が注目される理由として、先にあげた大学の変化に伴う教育方法の改善に関する問題以外に、学生の問題として、学力低下、無目的に進学してくる学生、大学生活への不応といった学習継続に関する問題が挙げられる。

しかし、初年次教育に関する研究は始められたばかりであり、効果的な教育プログラムを開発するのは実際にはこれからである。初年次教育は、日本においてその概念が明確にされておらず、大学によっても初年次教育科目の内容にばらつきがある。一年次を対象とした教育科目に関しては、リメディアル教育や情報処理教育、専門基礎教育など基本的な学習スキルに関する項目が多く、「自己探求・自己実現」、「職業選択・キャリアデザイン」に関する科目が少ない。日本の高等教育において自己に関する学習が必要であるにもかかわらず、その実践は十分に行われていないのが現状である。最近ではこのような状況を受け、各大学で試験的に実施されているようであるが、プログラムとしての報告は筆者の知る限りまとまったものは報告されていない。

比較的早期にユニバーサル化を迎えたアメリカでは、1970 年代頃から初年次教育 (FYE: First Year Experience) が注目され、現在では、多様な学生を大学へ受け入れる体制を整え、初年次教育科目を設立するに至っている。他国の先駆的事例を参考にしながら、日本においても有意義な初年次教育を実施すべきである。

目的・方法・結果

以上のような背景から、本研究では、急激に変化する新しい社会の要請に応える意味で、大学における自己発見の支援に関する研究を進めていくことにした。先に述べたとおり日本における初年次教育は、まだはっきりとした定義づけが行われておらず、実践されている科目についても整理されていない。その状況を見ると、まずはそれぞれの大学のニーズに応じた初年次教育の実践を行い、その情報を整理し、効果的な初年次教育科目を設立することが必要であろう。本研究の試みを、そのひとつの実践として位置づけ、自己の探求、自己実現に関する初年次教育科目の基礎資料を提供したい。具体的には、初年次教育において、自己発見の学習を行うことで、学生が自己をありのままに認識し、より充実した大学生活を送るために自己実現的な姿勢を育てるような支援を行うことを目的としている。その方法として、自己発見支援プログラムの開発と評価とあわせて、そのプログラムを補助的に支援するための自己発見支援 web システムの開発を行った。

一章：新しい高等教育システムと自己実現の教育

日本の大学は「ユニバーサル・アクセス型」の大学へ移行し、多様な側面から改革すべき時にきている。先に「ユニバーサル・アクセス型」の大学を迎えたアメリカの初年次学生を対象とした教育プログラム（FYE：First Year Experience）では、学生が、大学における学習をするための準備を行う教育を実施し、成功を収めている。そのプログラムの基本的概念は次のようなものである。

アプクラフトとガードナーらが編纂した『フレッシュマンイヤー・エキスペリエンス—学生の大学におけるサバイバルと成功の援助』（Upcraft, Gardner et al.）では、現代の大学は、学生を学問的、人格的成功者へ導く責任をおっており、それは学部段階教育の課題であること、初年次教育の成功は、大学教育の成功への確実な基礎を築くことにあるとし、それを次の六つの目標(1)学問的および知的能力を伸ばす、(2)人間関係を築き、維持する、(3)アイデンティティを発展させる、(4)職業およびライフスタイルを決定する、(5)健康を管理、維持する、(6)統合的な人生哲学を発展させる、にまとめている。このプログラムは、新たな大学のモデル（ユニバーサル・アクセス型）へ移行する大学にとって参考になるものであり、日本においても初年次教育科目の設立にあたり注目されるプログラムの一つである。本研究において開発した自己発見支援プログラムは、上記の2から6の目標と関連したものであり、初年次教育においては欠かせない科目に相当するといえよう。

一方現代の大学生（1990年代以降）は、従来の大学生と比較して生き方そのものが変化し、自分のやりたいことや将来の目標から出発して実現するコミュニティ（場）を探る生き方へと変化している（インサイド・アウト）。対人関係の希薄化、自分を見失う傾向をもつ現代の若者を考えると、自分を見つめ直し、自分のやりたいことを探求するための支援をする必要があるだろう。従来の大学システムのままでは特にモラトリアム学生にはドロップ・アウト、ストップ・アウトを助長することになってしまう可能性がある。このような者には自己確立や自分の目標を見つける支援が特に必要であろう。

初年次教育では自己実現的な支援も重視されている。マズローが提唱した自己実現は、自分のあらゆる可能性をのばし、より完全な人間になるという意味である。しかし西欧的の自己を土台としているマズロー的な完全な人間が、東洋の文化において一般的な自己実現のモデルであるとは考えにくい。そこで本論文での自己実現とは、自他肯定的な関係性を築きつつ、自分の人生設計に基づいて、望ましい人生を実現していくという姿勢が整っており、実際にも自分にとって意味ある人生を送っていることとした。また、自己発見とは自己実現に向けての自己認識、自己理解を意味し、自分を見つめ直すという自己実現へ向かう重要な過程を意味する。後で述べるように、自己発見支援プログラムの開発にあたっては、ここに言う自己実現に向けてのレディネスを育てるという立場から開発を考えた。ここでのレディネスとは、教育や学習が効果的に行えるように、自己実現へ向けての発達の素地、心身の準備状態が整っていることである。

二章：社会的構成主義の立場からみた大学における学習—自己と他者の関係から

実践的な教育のあり方を裏付ける教育理論として J. レイブと E. ウェンガー（Jean Lave, Etienne Wenger）が提唱する正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation：LPP）理論がある。そこでは、新しくコミュニティ

に参加した新参加者が、正式な参加者として正統的 (legitimate) に参加し、一人前になる過程を学習ととらえている。学習というものを共同体 (Community) における正統的かつ周辺の参加ととらえ、実践共同体への参加という過程の中に位置付け、学習が人々の生活する社会の中に埋め込まれている営みと考えたものである。

このような学びの場においては、教員は知識を教授 (instruct) するインストラクターではなく、学生たちが集まることのできる「場」をつくり、学生自身の自主的な活動を支援 (facilitate) するためのファシリテーターであり、学生は、「自分で考えられる」、自ら「学び方を学ぶ」ことのできる学び手でなければならない。

また、学習環境については、ヴィゴツキーの理論 (Vygotsky) を援用すると、彼は学習のプロセスにおいて社会的に相互作用する重要性を説き、ある社会・文化の有する知識が、その社会の成熟した成員を通して、より若い成員へと受け渡されていく過程を ZPD (Zone of Proximal Development) と呼び、グループ内の仲間との相互作用によって、知的関心が高まり、より深い理解をうながすという、社会的関係のなかでの学びの重要性を述べている。これからの「学び」においてはこうした視点が重要であり、本研究において自己に関する学びのシステムを考案する際にもこうした視点を十分考慮した。

大学共同体は、友人、教師、職員などさまざまな成員から成り立つ。その中で学生は重要な他者と出会い、今後自分が生きていくために必要な知識やスキルを吸収していく。充実した大学生生活を送るためには、学習環境を含め、大学での生活環境を整備し、よりよい環境を提供することが望ましい。人は、よりよい環境の中で発達し、成長していくものである。

これらの理論から、日本の大学における学習環境は次の要素を持つことが重要である。第一に、学生同士、教師と学生、職員と学生の関係を促進し、よりよい関係が構築されること。第二に、上級生と下級生、教師と学生といった徒弟制の中で学習を進めることである。

大学生の発達の過程と初年次教育の位置づけをらせん構造のモデルに当てはめて説明すると次のようになる。一年次の学生はまず、大学共同体の中に周道的に参加し、コミュニティの一員として自覚をはじめ、初年次教育において、これから専門的な学習をしていくための準備をする。初年次教育では、一年次のみを視野に入れるのではなく、四年間を通して学生が発達していくことも視野に入れ、支援をしていく必要がある。一年次の学生はまずポケットゼミや講義、基礎演習などを通してコミュニティの十全的な参加へと近づいていくことになる。それは、らせんを上へ登っていく過程としてとらえられる。三年次になると、本格的にゼミへ参加することで研究手順や手法などを周道的に学んでいく。四年次では、卒業研究において、大学四年間で学んだことを集大成していくことが重要である。それぞれの段階において、学習し、発達していくためには、モデルとなる他者、リーダーとなる他者、指導者となる他者などコミュニティの成員によって引き上げられていく。初年次教育はこの「らせん」から外にはみ出さないよう、いわゆる「ストップ・アウト」しないようにうまく軌道にのせていくための支援といえよう。

次に、キャリア教育における「インプット・アウトプット」システムにあてはめ、一年次教育によって学生がどのように変容していくかを図式化した。まずインプット要因 (刺激要因) として、正しい自己認知 (社会的自己や過去・現在・未来を含む)、心理学の理論と手法の習得が挙げられる。次に学生は個人内、個人間、コミュニティの中で自分を認識し、学んだことを生かしながら自己を確立していく。獲得した知識を、このプロセスでどのように生かしていくか実際に体験しアイデンティティの確立へ近づくのである。そして最後の段階で、アウトプット要因として自己肯定的な態度の維持、自己実現的な態度の維持、アイデンティティ確立へと成長することを目標とする。

三章：現代の大学生を対象とした自己発見に関する学習の必要性とその課題

本研究での大学生という用語は、青年期後期と呼ばれる 18 歳から 22、23 歳くらいの年齢期に相当する若者を指している。日本社会の移り変わりにより、アイデンティティ形成過程の特徴が変化している。それと同時に、現代の大学生の生き方も、自分のやりたいことを見つけ、それをもとに新たな社会へ出て行くという生き方に変化してきている。また、現代の日本の若者に見られる特徴として、自分を見失うといった自己実現から離れる傾向、コミュニティへの帰属やその責任に対する感覚の希薄化といった自己中心的傾向が見られ、複雑に絡み合った学生の変容が、従来の大学のシステムでは十分に対応できなくなっている。そこで本章では、現代の若者の特徴を考慮しながら、現代の大学生の発達をとらえ、レディネスという視点から自己発見に関する学習の提案を行うことを目的とする。

本研究は、時代、社会・文化的側面を考慮し、先行研究から若者の特徴的な要素を取り入れ、大学生の生き方支援を提案することを最終的な目的としている。しかしアイデンティティの定義は、自分内部の歴史や時間（知識や経験）、他者との空間的なかかわり、時代や歴史、文化的背景といった多様な要素と関係しており、簡単なようでなかなか複雑な概念である。そこでこの複雑な概念をできる限り整理し、自己発見の学習の位置づけを行い、その上で大学においてこれから必要となる自己発見に関する学習支援の提案を行った。ここでは文献調査をもとに、現代の大学生に見られる特徴とその問題点を明らかにし、自己発見の学習の定義と育成すべき能力について整理を行った。

先行研究から、自己発見の学習において、現代の大学生に必要な二つの支援が明らかとなった。ひとつは、過去、現在、未来をベクトルとしてとらえる自己実現的態度、もうひとつは重要な他者とのよりよい関係性をつくる自他肯定的態度の育成である。それは同時に、問題解決能力（自己調節能力）の育成にもつながる。すなわち、自己発見の学習とは、自己実現的態度と自他肯定的態度を育成することを目的とし、自己発見の道筋づくりを支援するものである。

この概念を、個人内（personal）、個人間（interpersonal）、コミュニティ（community）という三つのレベルに分け、自己発見の学習における個人の発達過程と考えた。個人内（Personal）では、現在、過去、未来を意識させ、自己内省することで、個人内に自己実現の道、すなわち、個人の目標ベクトルを作れるようになることを目標とする。個人間（Interpersonal）では、自分を中心とし、それを取り巻く環境の中で、重要な他者との関係を通じて学習し、自分の中に取り入れていく過程を示す。（他者を認めることで重要な他者となる）コミュニティ（Community）への参加では、コミュニティの中で個人間のやり取りを通して学習し、自己実現ベクトルの未来の方向へ進む。その先には、コミュニティへの十全的参加という目標がある。このような過程を繰り返し、アイデンティティ形成がなされていく。ここでの自己発見支援プログラムでは、学生をそうした発達過程へうまく導くため、自己実現的態度や自他肯定的態度を身に付けるよう促すことを目標とした。初年次教育としては、まず自己実現への心の準備をさせることが重要と考えたからである。

四章：自己発見支援プログラムの開発と評価

本章では、大学生が、自己をありのままに認識し、より充実した大学生生活を送るために、自己実現的態度、自他肯定的態度の育成を支援する自己発見支援プログラムの開発と評価について詳述する。具体的には、プログラムのねらいとその内容、流れ、学習形態、評価（初年次教育に向けてのプログラム準備段階の評価、アンケートから見た目標到達度および、学生の変容に関する評価、心理測定尺度からみた総合的評価）に関して述べる。これらの結果から、初年次教育のプログラムとして有意義であることが示唆された。

本研究が提案する自己発見の支援は前述のように「学びの支援」をするというより、「学び」のための準備を行うレディネスの意味合いが強いことをここで述べておきたい。大学において自己理解に関する教育は、自己の探求や自己理解に関するプログラム、キャリア教育や学生相談などで行われているが、他者と交流しながら自己分析し、他者との関係性を築くという教育が系統的に実践されている報告はないようである。特に自己実現へ向かってのレディネスという観点から自己理解を支援する教育は、現代の大学生の現状からみて早期の段階で必要であるにもかかわらず、そのための支援は十分になされていない。本研究では、現代の大学生（若者）の持つ特徴をふまえ、既存の様々な自己認知の試みを利用しながら、必要と思われる支援プログラムを組み合わせ開発した点では、筆者の知る限り実践報告はなされていない。すなわち初年次教育プログラムとしては、他に見られないものである。なお、本研究の評価対象は女子大学生であるが、本プログラムは現代の大学生を対象として開発してきた。

本プログラムでは、自己実現に向けての心の準備状態が整っているという意味でレディネスを用い、この観点から自己実現的な自己形成を支援するための自己発見の学習を提案する。具体的には、自分が何者であるか、正しい自己認知を行い、何を学びたいかも含め、自己実現的態度を育成すること、そして対人関係のスキルを育成することも含め、自他肯定的態度を育成することを重視している。

以上の背景から、以下のようにプログラムの開発と評価を行った。第一に、大学生を対象にプログラムを開発、実施し、自己実現的態度の育成と、適切な対人関係を築く意味での自他肯定的態度の育成に注目し、自己発見の支援が大学生にとってどの程度有効であったかを検証した。これは初年次教育に向けての準備段階の評価にあたる。第二に、

先に実施した評価からプログラムを改良、実施し、自己発見の学習により学生がどのように変容したかについて、学習目標到達度評価と、アンケートの自由記述、全体評価から学生の変容について評価した。第三に、第二に述べた評価と合わせて、自己肯定意識、アイデンティティ確立に関する心理測定尺度を用い、自己の肯定的受容、自己実現的態度、自他肯定的な関係性に関する学生の変容について評価を行った。最後に、これらを総合して本プログラムの有効性を総合的に考察していく。

プログラムの内容は、「1. 性格に関する自己分析」「2. 将来へ向かっての自己分析」「3. コミュニケーション場面での自己分析」と大きく三つの項目に設定した。それぞれの内容は、「1. 性格に関する自己分析」では Step 1 エゴグラムで自己分析、Step 2 短所の見方を考える、「2. 将来へ向かっての自己分析」では Step 3 過去の自分をふりかえる、Step 4 将来の人生に望むもの、Step 5 ミッション・イン・ライフ、「3. コミュニケーション場面での自己分析」では、Step 6 OK グラムで基本的な構えの分析、Step 7 アサーティブ度診断とロール・プレイ、Step 8 イラショナル・ビリーフの発見、Step 9 禁止令に気づく、Step 10 無意識のネガティブ思考に気づく、Step 11 コミュニケーション場面での自己理解、Step 12 ストロークとほめ言葉のロール・プレイとした。Step 1 から Step 12 までを1サイクルとし、これを繰り返す行うことで、現時点での自己分析を定期的に行い、長いスパンで自分がどう変化したかを把握させることが可能になる。これは、時間と共に自己の心の状態が変化するためである。

準備段階での評価について述べると、自己発見支援プログラムは、全体的に肯定的な評価が得られたことから、自分の性格をありのままに認識すると共に、適切な自己形成を行い、うまく他者と交流するためのレディネスを支援するという目的は、ほぼ達成できたといえるだろう。特に自己発見の学習が、自己肯定感の獲得、社会性の発達、早期実施の有効性、という点において、有意義であり、早期の段階から自己発見の学習を継続して行うことに意味があることが示唆された。初年次教育において、入学時から自己発見に関する学習の支援が必要であるといえる。

次に、初年次教育として自己発見の学習を提案し、それが学生にとってどの程度有効であったかを「自己の肯定的な受容」、「自己実現的態度」、「自他肯定的な関係性」の三つの要素からプログラムについてのアンケート評価と共にこれらの要素に関する心理測定尺度（自己肯定意識尺度、アイデンティティ尺度）を用い、検証した。

125名の学生のうち、得点が明らかに増えたもの62名(49.6%)、得点があまり変化しなかったもの34名(27.2%)、得点が明らかに減ったもの29名(23.2%)であった。約半数近くの学生の得点が明らかに改善されたことになる。しかし自分を正しく知るといふプログラムの目的から見れば、得点が増えることがすぐに自分を正しく知ったという事を意味しない。むしろ自分をありのままに見たがゆえに得点が減ったという場合もあろう。その意味で得点の改善だけでこのプログラムを評価することはできない。しかし自己受容、自己実現的態度、自他肯定的な態度などは心理テストの得点からほぼ見て取れるので、得点を中心として自由記述やアンケート評価も使い、それぞれの学生の変容について総合的に判断した。詳しくは全学生の変容について個々に記述したもの（「心理テストの得点から見た各受講者の変容」）を見てもらわなければならないが、ここでは自己実現的な構えがとどっている（レディネス）かどうかの分類に従って、それぞれのグループの大きな特徴を以下に述べることにする。

(1) 自己実現的な構えがとどっているとみなされたもののうち、得点が増えたものは29名であるが、自己肯定意識、アイデンティティ確立の7成分のうち4成分以上に得点の上昇、増加があったものが12名いた。そのうち例えばある学生は、自由記述で、「これから先自分が成長していくのが楽しみ」と述べており、得点が改善され6成分がすべて平均点を超えた。自分をうまく構造化して、自己実現的な構えを作れたように思われる。また「この授業は自分をさらけ出しているのだからクラスの皆と一体感を感じています。特に隣の席の友人とは何でも話せる友人になれそうです」と述べており、大学共同体への参加を促すのにも役立ったようである。この学生たちはアンケート評価も高く、プログラムが有効に働いたようである。

このほか特徴的なのは、もともと得点が高く受講前に自己実現的な構えがとどっているのに、なお得点が増えたものが10名いる。ある学生は、自己受容とアイデンティティ確立の得点が増加しただけではあるが、それでも最後の自由記述では、「自分のことなのに、意外と自分についてあまりわかっていなかったことに驚いた」「大学では自分に役立つことがたくさんあるから、いろんなことにチャレンジしたいと思います。友達と支え合って楽しい大学生活を送りたい」と述べている。ただし一部の学生は、受講前から自己実現的な構えができていたと推測され、得点的にほとんど変化しないものがある。

自己実現的な構えがととのっているものとみなされるもののうち、得点が明らかに増えたもの 29 名、あまり得点に変化しなかったもの 15 名、得点が明らかに減ったもの 9 名であったが、全体にプログラムに対するアンケート評価が高いものが多い。また他のグループに比べ歪んだ思考（イラショナル・ビリーフと禁止令、そのうちでも特に自己否定的な傾向が強い思考）に肯定的に答えるものが少なく、あまりネガティブな影響を及ぼしていないようである。

(2) ほぼ自己実現的な構えがととのっているもののうち、明らかに得点が増えているもの 8 名（うち 4 成分以上の得点の上昇・増加があったもの 1 名）、あまり得点に変化しなかったもの 3 名、得点が明らかに減ったもの 2 名であった。

このグループの場合は、一部にまだ自己実現的とみなされないところがあり、プログラムを通しそれに気づくという場合が 2 例あるが、それ以外は歪んだ思考がその部分の成長をやや阻んでいるのではないかと考えられる。ただし OK グラムの結果自己肯定的な構えができていたり、アイデンティティ確立の得点からみてそれほど心配することはないと判断した。このグループのアンケート評価もかなり高いものが多い。

(3) もう少しで自己実現的構えがととのうものうち、得点が明らかに増えたもの 6 名、あまり得点の変化がなかったもの 4 名、得点が明らかに減ったもの 7 名であった。前のグループに比べて得点が平均点に達しない成分数がやや多く、たとえその成分数がそれほど変わらないとしても、ある特定の成分の得点が平均点よりかなり低いという特徴があり、その点で自己実現的構えがととのうものにもう少し時間がかかると判断した。先の 2 グループに比べアイデンティティ確立の得点がわずかではあるが平均点に達していないものが多いのもこのグループの特徴であろう。なお得点が明らかに減っているもの 7 名のうち 5 名が歪んだ思考に肯定的に答えており、いずれもそれが得点の改善にマイナスの影響を与えているとみなしてよいであろう。

(4) 自己実現的構えがととのうには時間がかかるものうち、得点が明らかに増えたもの 19 名（うち 4 成分以上の得点の上昇・増加があったもの 5 名）、得点がほとんど変化しなかったもの 12 名、得点が明らかに減ったもの 11 名であった。ある学生は、自己受容、充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張の得点が上昇し、アイデンティティ確立の得点も増加した。しかし受講前の得点がかなり低いため、1 成分以外すべての得点が平均以下であった。この学生はイラショナルビリーフ 9、禁止令 12 のほかにも、禁止令 3「自分はこの世にいても仕方がない」に肯定的に答えているにもかかわらず、珍しく得点の改善が顕著である。最後の自由記述では「このプログラムで自分はもうどうしたらいいのかわかったこともあり、考えさせられることも結構あったので、学んだ事を忘れずにより良い人間関係をつくれるように励んでいきたい」と述べており、ここでの自己学習がプラスに働いたようである。こうした得点の改善傾向が顕著なものにとっては、プログラムが有効に機能したといえよう。

このグループではもともと得点が低く（得点が明らかに増えたもの 19 名中 17 名、ほとんど得点の変化のないもの 12 名中 9 名、得点が明らかに減ったもの 11 名全員が、受講前から 7～6 成分すべて得点が平均点以下であった）、歪んだ思考に肯定的に答え、自己否定的傾向の強いものが多い。特に、得点を明らかに減らしたものは、肯定的に答えたイラショナルビリーフや禁止令の数が多い傾向にある。

またこうした学生は特に今後自己実現的で自他肯定的に生きられそうかどうかを問う問いに対するアンケート評価がいずれも低く、プログラムの目的達成度についてのアンケート評価も 9 名中 4 名が低かった。プログラムが有効に機能しなかったようである。これは他のグループにあまり見られない特徴である。

以上各グループについてその特徴を見てきたが、ほとんどの学生が、自由記述で、自分を理解することができた、あるいは自分を見直せたなどと述べており、自己の正しい認知を持つという点では目的を達成できたのではないかと思う。また新しい自分を発見できたと語る学生は多く、その点でも有効であったと思う。プログラム全体についてのアンケート評価では、自分を肯定的に受け入れられるようになった者 73.6%、自分が人生において求めているものを実現するために努力しようと思った者 79.2%、今後自他肯定的な自分をつくれそうだと思う者 72.8%であり、その他このプログラムが自分の成長や学びに役立ったとするものもいずれも 70%以上であった。アンケート評価から見る限り、自己実現に向けてのレディネスを育てる点で有効であったと推測してよいだろう。

また同様のことを得点から見ると、得点が明らかに増えた学生は 62 名であり（この点は得点のみでは判断されないことは言うまでもないが、あえて得点から見てということと言うと）、それにわずかに得点が増えたもの 6 名を加えると、68 名（54.4%）の学生が自己実現的な傾向を強めたことになり、得点のみから見てもプログラムはかなり有

効性をもっていると見て良いだろう。ただし自己実現的構えがととのっていない学生 59 名のうち得点がほとんど変化しないか減ったものが 29 名 (23.2%) おり、こうした学生に対する対応は今後の課題である。おそらく継続的なケアが必要であろう。

以上自己実現に向けてのレディネスができていくかどうかの判断を通して、本研究における自己発見の学習が、学生の自己実現に向けてのポジティブな態度を促進させたかどうかを考察してきた。テストの得点の増加を自己実現に向けてのポジティブな態度の反映と考えた場合、約半数の学生が自己実現的な傾向を強めたといえよう。たとえ得点が増加していなくても、自分と向き合うことによって、より実態に近い自己理解を持つことができたと考えられるなら、間接的とはいえ、自己実現に向けての第一歩を踏み出したといえる。しかし、得点の増減はプログラムの学習のみによって引き起こされるとは限らないので、得点の増減とプログラムの学習との相関には慎重な配慮が必要である。

今後は対象を広げるとともに、追跡調査を行い、より詳細な分析を行う必要がある。また、学習者に応じてプログラムの内容を厳選することが望ましく、学習者のニーズとプログラムの組み合わせのパターンを決める必要があるだろう。そして、専門的なカウンセラーではない教師が、こうしたプログラムを通して学生の相談に応じられるよう支援するシステムや、学生が悩みを自分で解決できるようなシステム開発も行う予定である。

また本プログラムは、一般の教師が学生の行った自己分析結果を参考にしながら、学生に対してアドバイスする場合に利用できるということも重要な点である。自分をどのように改善していけばよいか、次に自分が何をしなければならぬかなど、助言を与えることができる。最後になったが、学生の自由記述からみる限り、ファシリテーターのアドバイスによって、自己理解が深まり自信が持てるようになった、あるいは、初対面の学生同士の話し合いがうまくいくようになり良い友人になれたことなど、ファシリテーターの介入が学生の大学共同体への参加を支援する側面がある。しかし、ファシリテーターの介入の仕方や、学生への影響に関する分析は今後の課題としたい。

五章：自己発見支援 web システムの開発と評価

本章では 4 章で詳述した自己発見支援プログラムを Web 上においても実施できるよう、Web システムの開発を行った。本システムはインターネット上でファシリテーターとやりとりしながら、自己発見を促す特徴を持つものである。ここではシステム開発の経緯と概要、評価について述べる。

現代の青年は、内省の乏しさや友人関係の深まりの回避といった特徴を示し、自分自身への関心からも対人関係からも退却してしまう傾向が見られ、学生相談窓口を訪れるどころか電話による相談でも抵抗を感じる大学生が増えており、学生相談ツールとしてインターネットが使われるようになった。このような状況の中、今後の大学教育において、学生が自分自身についての理解を深め、学生期の過ごし方について考えることを促す教育が意味を持つ。特に、大学の一年次では、人間関係の悩みを持つ者が多く見られ、より早期の段階から自己理解を促す教育が必要であるといえる。

一方大学において、現代の若者の特徴をとらえ、本研究のように多様な面から自己理解を促す教育が必要であるにもかかわらず、こうした実践が少なく、自己理解（自己発見）の学習に関する支援システムの報告も見られない。このような現状を受け、気軽に多くの学生が利用できるよう、自己発見 Web システムを開発するに至った。本システムは、先に開発した自己発見支援プログラムを Web 上でも実施できることを目的としている。現システムでは、授業を支援するものと位置づけ、Web 上においても個人的に学習することができ、自ら他者と交流しながら学習していく仕組みを取り入れたものである。

対面で行う自己発見支援プログラムの実施を通して、様々な問題点が浮上し、そこから必要な機能を考えた。最終的に実現を想定しているシステムの機能は次の通りである。

- a. **自己分析に関する概念の理解**：自己分析に関する専門的な概念の解説を行い、学生が容易に理解しやすいようにガイドを設ける。
- b. **診断表の自動化**：いくつかの間からなる診断表に対してクリックして答えると、自動的に診断結果が出てくる。診断結果からシステム上の解説を見て自分で自己分析を行う。
- c. **リフレクションシート**：システム上で記入が可能なリフレクションシートを取り入れる。学習した事柄、自己分

析結果を記入し、まとめるためのシートである。

- d. 複数ウィンドウ表示：ワークシート、リフレクションシート、診断テスト、解説について別ウィンドウの表示形式をとる。リフレクションシートをまとめる際に、別ウィンドウで内容をふりかえりながら記入が可能である。
- e. 学習位置の表示：プログラム全体の流れのうち、どの部分を学習しているのか、学習の位置を確認するためのガイドを表示する。
- f. ファシリテーターとの情報交換：ワークシート、リフレクションシートをファシリテーターへ送信し、記入フォームを予め設定したメールでの相談ができるようにする。ファシリテーターは、これらのデータから個人特性を把握し、アドバイスを行う。
- g. コミュニティ支援ツール：学生同士や教員（ファシリテーター）との関係を促進するための仕組みを取り入れる。

自己発見支援プログラム開発の初期段階で、Webを用いた支援システムが必要であると考え、そのとき実施していたプログラムを用いて、Webシステムを作成し、先にあげた a、b の機能について簡単な評価を行った。評価の目的は、自己分析に関する概念について熟知していない学生が、それについて比較的簡単に理解できること、自己分析が手軽にできることである。

評価は、プログラムの理解度についての問いと（5件法）、あわせて自由記述も行った。その結果、システムにより専門的な自己分析の概念を、比較的短時間で理解できたが、文字が多すぎて見づらいところや文章の表現が分かりにくい部分があり、改善を要することが分かった。また、自動的に診断結果を計算して表示できる機能とガイドにより、速やかに次の自己分析に移ることができ、簡単に自己分析を行うことが可能となった。そして、システムを利用したい者、システムに対して満足した者がほとんどであったことと、自由記述からこのシステムが学生にとって役立つと推測された。自分を見失う傾向、相談に抵抗を感じている学生が増えている現状を考えると、自己分析を自分で簡単に行えること、それが学生に役立つことは重要である。

次にプログラム実施の問題点と先の評価結果から、Webシステムに、c、d、e、fの機能を新たに追加することとし、開発を行った。ここで重要なことは、自己の思考を外化し表現するための鏡（reflector）として利用可能なテクノロジー（メディア）が身近に存在すること、つまりコンピュータを、自己を映し出す鏡として利用できることである。また、インターネット上で自分の問題を記入するという作業は、自己の思考を促進する。それは、メールを作成するという行為においても同様である。つまり他者に対して文章を綴るという行為が重要な意味を持つ。なぜなら「自己は心の中の目的に応じてつくられると同様に、話し相手に応じて作られる」からであり、自己と他者が対話することで、自己の「物語」を形成し、自己内省がさらに促進するからである。そして、視覚的に匿名である条件下では、有意に多くの開示が見られることから、自己開示しやすい状況として、視覚的に匿名性を持つ電子メールを用いたシステムを開発した。

実施概要

パイロットスタディの評価から、本システムを改良し、a、b、c、d、e、fの機能を追加して評価を行った。学習アドバイザーとして筆者が関与し、リフレクションシートを参考にしながらアドバイスを提供した。学習者は、学習の途中でメールをアドバイザーへ送信する。メールの内容は、学習のまとめや感じたこと、自己発見に関する悩みをまとめたリフレクションシートを送信する。学習者は、あらかじめ設定している項目についてまとめ、それを Word ファイルに入力したものを添付ファイルとして送信する。アドバイザーはそのメールに対してアドバイスシートを返信し、学習内容、自己分析、学生の悩みに対するアドバイスを学生に行った。

評価の概要については、次のとおりである。(1)事後アンケートによる全体評価では「a. Webシステムにおけるプログラム内容全般に関する評価」、「b. Webシステムの機能に関する評価」を、プログラム全体が終わった後に学習者に答えてもらう（5件法、自由記述）。評価方法は5件法により得られたデータについて肯定意見ほど点数が高くなるよう、1点から5点と計算して平均をとった。(2)学習目標到達度評価では「a. 各プログラムの目標達成に関する評価」、「b. プログラム全体を通しての目標達成に関する評価」を、それぞれ各プログラムの最後(a)と、プログラム全体が終わった後(b)に実施した。そこで各ステップの目標とプログラム全体の総合目標をどれだけ達成できたか学習者に評価してもらう（5件法）。各ステップの目標、総合目標に関する評価方法については、上記(1)の評価、

5件法と同様である。(3)心理測定尺度による評価では、4章で用いた「a. 自己肯定意識尺度に関する評価」、「b. アイデンティティ確立尺度に関する評価」、と合わせて、「c. 特性的自己効力感」(行動を起こす意志、行動を完了しようとする意志、逆境における忍耐に関する尺度)に関する評価を、学習の事前、事後に実施し、その得点変化から学生の変容を見た(心理測定尺度の得点変化)。

上記(1)、(2)、(3)の評価結果について、学生がどのように変化したのかを質的に評価し、最後に総合的な評価を行った。

パソコンを用いた自己発見の学習において、さらなる学習内容の理解と、自己内省が促進されたことが示唆された。特に、リフレクションシートによって学習のまとめと学習内容の確認ができたことで学習が促進されたこと、シートをまとめることで自己内省が促進されたこと、またアドバイザーとの交流やアドバイスにより学習を継続する意欲が維持され、他者からアドバイスをもらうことでより自己理解が促進されたことに関して言えば、自己発見の学習においては、リフレクションシートと他者からのアドバイスが大きな意味を持つといえるであろう。

自己発見の学習には、ワークシートやリフレクションシートなど個人的に一人で静かに考える場面、他者から意見や感想をもらう個人と個人が交流する場面、対面での授業など他の学習者や助言を与える者と交流する場面がある。これらのように個人的な場面、個人間で交流する場面、コミュニティの中での場面、それぞれにおいて自己発見の学習がなされることが重要である。

プログラム、システム開発を通して、授業において定期的に自己分析を行うこと、システムにおいて学習内容を十分理解できること、悩みを相談しにくい場合は非対面での相談活動を利用すること、というように、プログラムとシステムがうまく連携することで自己発見の学習がより促されるといえる。大学生にとってプログラム、システムの両方から系統的に支援ができるように全体的な教育システムを設計することが重要である。

質的な分析を行ったとはいえ、実施人数が少なく信頼性に欠けるため、今後は実施対象を広げ、データを詳細に分析しなければならない。また、対面で行うプログラムとの連携を図るため、得られたデータを比較し、Webシステムの効果を高めていくことが課題である。

また、メールカウンセリングの機能に関しては、今まで実施してきたアンケートやリフレクションシートなどから、学生が悩んでいる事柄を整理してカテゴリにわけ、自己の構造化を促す問いを入れる予定である。またコミュニティ支援ツール(g)については、まだ検討中であり、今後取り入れていきたい。

今後は、システムを実際に運用し、システムの各機能がどのように学生に有効であったか、システムによって学生が変容していく過程も詳細に調査していく必要があると考えている。また、人と接することが苦手な者に対しては、欠点を助長するシステムであってはならないので、少しずつ他者と健全な関係を築くための支援も考えていかねばならない。そして一般的に大学で利用してもらうために、自己発見の理論に詳しくない教員を考慮した支援システムに発展させるための研究を続けていく予定である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、主として、我が国の大学における初年次教育を取り扱い、学生の生活や生活指導の観点から、情報技術を含む自己発見の支援の研究を進め、研究成果を呈示している。

その研究にあたって、近年、私立大学を中心として、初年次教育が盛んになってきたことの現状が述べられる。そして、こうした事態の登場は、M. トロウの大学論に基づき、我が国の大学がかつてのマス型から、今やユニバーサル型に移行したことによると位置づける。そうすると、すでに1970年代にユニバーサル型に突入した米国の大学において、授業評価の問題をはじめ、その初年次教育(First Year Experience)が取り組まれていることが判明する。

そこで、両者のプログラムを対比的に検討することにより、とくに我が国の場合、まだ日が浅く、多様で系統化されていないが、共通しているところは、教育方法上、基本的な学習スキルを学生に身につけさせる学習指導の側面と、自己概念が希薄な学生への自己探求や自己実現をめぐる生活指導の側面などがあることが明らかにされる。

我が国の初年次教育では、前者の学習指導の側面は、かなり多くみられ、研究も進んでいるが、後者の生活指導の側面は、いまだ不十分なので、本研究では、こちらを取り扱うとするが、それにあたり、現代に至る青年の自己像をめぐる文献を丹念に追ひ、自己と他者との関係の中でよりよく生きるスキルを身につけることを支援する「自己発見の支援」こそが、今日の重要な課題であるとして設定される。

このことは、近年の「認知的徒弟制研究」を援用して、正統的周辺参加の概念に基づき、初年次教育の重要性を位置づけるとともに、周辺から中心化の方向へらせん型に進級していくような大学共同体への十全な参加には、学習者としてのアイデンティティの発達と並行して、上級生や教師などの他者との関係性が必要であるということがモデルで示され、裏打ちされる。

こうした一連の準備のもとに、まず、自己発見支援プログラムの開発と評価の研究が実施される。そのプログラムは、エゴグラムやOKグラムなどの心理測定尺度を適切に用いるもので、①自己の性格に関する分析、②将来へ向かっての自己分析、③コミュニケーション場面での自己分析の3部構成からなる。ここには、個人内から個人間を経て共同体へつなぐことが意図されている。このプログラムは、関西のある私立女子大学生125名を被験者として実施される。その結果を総合的に評価したところ、自己発見支援プログラムとして、所期の目的を達成しうることが判明した。

そこで、続いて情報技術を用いた自己発見支援 Web システムの開発と評価の研究が実施される。基本プログラムは同一であるが、そのシステムでは、ネット上アドバイザーがつき、また重要な箇所には、リフレクション・シートが画面上用意され、学生はそれに書き込む工夫がなされる。これを同じ大学の学生で実験として試みたところ、有効であることが示された。

最後に、今後さらに広く対象者を広げる試みなどの研究が展望されている。このように、本論文では、大学における初年次教育を対象として、自己発見の支援という今日必要とされる新たな領域に果敢に取り組み、成果を示したことは、高く評価される。

以上の理由から、本論文は、博士（人間科学）の学位に十分値すると判定した。